

日本歴史の諸問題

塙 叡

まえがき

日本歴史上の古代から近代に至る時代の諸問題のごく一部を、短い文の集まりとして書いたのが本稿である。小説でいえば短編集というところか。

現在日本歴史は全体として従来の固定観念や定説といったものにとらわれずに、広い視野をもって見直そうという気運にあるといえると思う。筆者の関心領域は時代・地域・項目の広い範囲にわたり、今回の試みはその一部に過ぎない。史料集を編纂することが流行しており、もちろん重要な業績も多いのだが、問題意識がすぐれていなければ史料の発掘も期待できないのである。以上のような視点をとりくんだのが本稿であるが、成功しているかどうか心もとない次第である。(あとがきは省略する。)

A 古代・中世

(1) 七世紀の日本

(イ) 天智天皇

いわゆる不改常典は、あるいは皇位継承に関するものである等諸説があり、現在確定することはむずかしいが、以後歴代の天皇即位のさい、

それが守られ伝承されたことは、中御門天皇(宝永七年、一七一〇、一月十一日即位)の時代まで行われたことにより明らかである。元明天皇即位にあたって、「天地と共に長く共に遠く改るましまじき常の典……」と書かれている。(新日本古典文学大系一二、『続日本紀』、一九九〇年、岩波書店、一二一・三八二―三八三ページ)

明治天皇は践祚のさい、先例にしたがって天智陵、前期三代すなわち光格・仁孝・孝明の三陵(京都泉涌寺)へ奉告のため、勅使を参向させた。その後明治一〇年京都市幸のさい天智陵にかわって神武天皇陵へ参拝し、以後神武と先帝三代の陵への参拝が例となる。皇室が天智天皇のことを非常に重んじてきたことはきわめて興味深い。私見では、古代日本国家の最初の天皇であるという思想が受け継がれてきたためと思われる。

一方神武天皇の史料上の初見は壬申の乱の時であり、その後は長く忘れ去られて、復活は明治政府によってなされている。(橋本哲二「橿原神宮の『認知』」、『新潮45』、一九九三年六月号、七九ページ)七七〇年(宝亀元年)光仁天皇が即位し、ここに天武系から天智系へと皇統が移って以降天智系の皇統が維持されたことから、天智天皇が明治維新まで尊ばれたことは当然である。

天皇陵は京都山科にあり、「東西一四町、南北一四町」(『延喜式諸陵寮』)と広大なものであった。中世には荒廃したが、江戸時代には山科郷人により管理され、保存された。天武元年五月条には造営のための人夫徴発の記事があり、文武三年十月条には修造の官の任命がある。なお万葉集には「やすみししわご大君のかしこきや御陵奉仕^{つか}ふる山科の鏡の山に……」^{とよむ}額田主の歌一首がある。(佐々木信綱編『新訓万葉集』上巻、一九九三年、岩波文庫、八四ページ)

また明治三年一二月三日「天智天皇千二百年祭御祭典」が山科陵で行われた。〔太政官日誌第六十号〕一石井良助編『太政官日誌』第四巻、一九九〇年、東京堂出版、三二四ページ）

(四) 天皇初見

大阪府南河内郡国分町の松岡山古墳から出土した、七世紀の官人で六四一年死去の「船首王後墓碑銘」（銅板）中にみえるのが初見であり、天智七年戊辰年（六六八）一二月である。

(イ) 庚午年籍

律令は「凡そ戸籍は恒に五比（三〇年）留めよ」と定めたが、近江大津宮の庚午年籍は周知のように永久保存とされた。天智九年（六七〇）二月祭に「造戸籍……」とあるのがそれに当る。氏・姓その他の身分確定がこの戸籍によりなされたと考えられている。承和一〇年（八四三）ごろまでは存在したらしいがその後廃絶している。現在その断片すらみることはいないが、失われた理由はおそらく最重要な書類であるため、一か所に集中管理されていたものが、火災等の災害により一挙に亡失したものであろう。それにしても地方にその写しすら残されていないのは奇妙である。

七世紀中に、六六三年の白村江の敗戦を契機として国号を従来の倭国から日本国と改め、七〇三年遣唐使粟田真人によって唐に報告されている。〔旧唐書倭国日本伝〕従って庚午年籍に登載された者は日本国の国民であり、まさに日本人とよばれる人々がここに誕生したといえよう。残念ながら今日それを立証することはできないが、身分・血統を明記した本戸籍は後世の庚寅年籍などとは異なり、明治国家の国民を登載した明治五年（一八七二）の壬申戸籍と比肩する性格の戸籍であったと考える。

(二) 漏刻

「天智紀」に「漏刻を新しき台に置く。始めて候時を打つ。鐘鼓を動かす」とみえる。六七一年四月二五日に水時計を作って時を知らしめた。権力者は暦とともに時間をも支配しようとする。太陽暦では六月一〇日に当り、大正九年（一九二〇）「時の記念日」が制定された。（文末の補注参照）

(イ) 伊勢神宮

天武天皇即位元年（六七二）六月二十六日に「朝明郡の迹太川の辺にして、天照大神を望拝みたまう」とあり、二年四月に大来皇女を伊勢神宮の斎宮とし、この時以後恒例化する。三重県の松阪市と伊勢市との間に明和町があり、ここに斎宮の宮殿と斎宮寮とよばれた役所があり、鎌昭和五四年に国の史跡に指定された。平安時代に最盛期を迎えたが、鎌倉時代に衰え、後醍醐天皇の時代をさいごに消滅している。（檀崎彰編『東海考古の旅』、一九八九年、毎日新聞社、八六ページ）なお最近の発掘調査で須恵器の猿面の硯が発見され、裏面に「吉」の文字が刻まれていた。平安期のものとみられる。（『伊勢新聞』、一九九三年六月二日、『文化財発掘出土情報』、一九九三年八月号、ジャパン過信社、四七ページ）また六八五年には二〇年に一度の式年遷宮の制も定められて、天皇家と伊勢神宮との関係は深まってゆく。

(イ) 音博士（こえのはかせ）

持統天皇五年八月に「大唐の続守言、薩弘恪云々」とあるのが初見とされる。式部省大学寮に所属し、大学生に漢字の発音を教えるのを役目とする。大学寮では、古い呉音に代わって漢音を教えこもうとした。養老四年（七二〇）にも漢音を用いることが令せられ、桓武天皇は七九二年に同様の令を発したが、実効はなかった。今日の漢字のよみ方に呉音・

漢音（それに唐宋音も加えて）の混用が見られるのがその証拠である。

(1) 楷書

六八六年僧宝林によって書写された「金剛場陀羅尼經」は現存最古の写経といわれるが、その書風は楷書をよくした唐の欧陽詢の書体に似ているといわれる。（京都市、小川広巳氏所蔵）欧陽詢の名筆には程遠いものがあるとしても、日本における楷書は行政文書の文字として用いられた点に意義がある。木簡の文字はわかりやすくはつきりと書かれなければ、末端への伝達がむずかしくなる。そして楷書が成立して、はじめてその一部をとったカタカナ、くずしたひらがなが成立する。木簡に書かれたひらがなの最古のものは、現在までのところ宮城県多賀城市浮島から発見された九世紀中期から後期と考えられるものや、貞観九年（八六七）讃岐国戸籍帳に書かれた「藤原有年申文」（東京国立博物館所蔵）とされている。（平成四年一〇月一二日付『毎日新聞』の記事による。）

(4) その他

a 国郡制

古代に整備され、近代、いや現代に至るまで影響力を持ち続けている制度については、別の機会により包括的に考える必要がある。

六八〇年（天武九年）に伊勢国から伊賀国、駿河国から伊豆国がわかれて成立した。六九九年己亥年の木簡には「阿波評」の文字がみえ、国郡制の整備が進んだ。弘仁一四年（八二三）越前から加賀が分離して国郡制は完成された。

b 新字

六八二年境部連石積らにより「新字」四四巻が成立した。いわゆる「国字」を集めたものという説もあるが、一三世紀後半の成立といわれる『本朝書籍目録』にみえるが現存しない。日本語の成立という困難な問題と

も関連があると考えられるがはっきりはわからない。

(2) 女真と日本

女真はジュルチン Jurchin といい、女直ともよばれ、ツングース系の民族である。はじめ震国と称していたが、唐の玄宗皇帝から渤海郡王に封ぜられた機会に「渤海」と改めた。日本は渤海使が神亀四年（七二七）来朝してから通交が開始され、日本海による能登その他への着岸が盛んに行なわれて、延長八年（九三〇）まで続いた。天安三年（八五九）能登国珠洲郡に到着した渤海使烏孝慎が献上したのが「宣明曆」である。儀鳳曆（六九七―七六三施行）、大衍曆（七六三―八六一）のあとを受けて、八二二年唐の徐昂の撰した宣明曆を貞観三年（八六一）採用したのである。この曆は、唐では七一年間用いられたが、日本では江戸時代の貞観元年（一六八四）までの八二〇年余用いられた。

寛仁三年（一〇一九）女真人である刀伊の入寇があった。刀伊とはDoe、すなわち高麗人が女真人を夷狄視して呼んだ名称である。突然の来寇に京都の貴族たちはあわてふためいたが、大宰権帥藤原隆家らの防戦によりしりぞけることができた。このさい下向した武士の中には菊池氏など九州に土着したものもある。この事件については後述する。

一一一五年阿骨打により金帝国が誕生した。金という国号は、阿骨打の属する完顔部族の本拠地がハルビン東南のアンチュフ（按出虎）河のほとりにあり、アンチュンが女真語で黄金を意味するところからつけられた。（岡田英弘『世界史の誕生』、一九九二年、ちくまライブラリー、一九〇ページ）

一二二五年にはキタイを征服し、一二二六年には開封を占領して、宋の皇帝父子を捕えた。華北の地は淮河に至るまで金の領土となり、一二二七年から南宋の時代に入る。金と南宋との国境線は淮水―大散関の長

いものとなった。国境地帯には多数の軍兵が配置され、多くの負担を南宋財政に強いた。(長井千秋「淮東総領所の財政運営」、『史学雑誌』第一〇一編第七号、一九九二年、一一三二ページ)

朝鮮では、高麗に武人政権が誕生していたが、金に屈服して金の年号を採用した。このような状況は、日本にとって重大な危機を迎えたはずであるが、日本歴史研究史上それを問題にとりあげたことはない。渤海との通交を考えれば、日本への侵寇の可能性はゼロではなかった。問題意識がないので、関係史料も今までの所全然ない。しかし一二一五年、チンギスハンの対金国作戦により、金朝は黄河の南に後退して、河南と陝西の地方政権に転落したから(杉山正明『大モンゴルの世界』、一九九二年、角川選書、一〇二ページ)、金の日本に対する脅威はなくなったのである。

時代はさかのぼるが、一一九五年金は辺境地方の遊牧民討伐作戦を行なったが、その命に応じた一人がモンゴル部族のテムジン(チンギス・ハーン)で、かれの名がはじめて記録に登場したのは、日本の鎌倉幕府の成立とほぼ同時期であった。(岡田、前掲書、一九四ページ)

明の支配力が低下した一六一六年女真族出身のヌルハチは後金国を樹立し、瀋陽を都とした。これが発展してのちに清帝国となり、江戸時代には清国の船が長崎に来航し(ただし国交はない)、明治政府は清と真に向から対立することになる。以上のようにみえてみると、古代以来日本と女真とは農年にわたって交渉を持っていたことがわかるのである。しかし女真との関係は、友好的な交易のみに止まらなかった。朝鮮の于山国(鬱陵島)は何度も女真族海賊団の被害を受けている。高麗顯宗九年(一一八〇)には多くの人と財とをうばわれ、同一〇年にも襲撃されている。女真はその余勢を駆って九州北岸を襲った。これが刀伊の入寇である。

(門田誠一「古代出雲と朝鮮半島との交流」、「日本海と出雲世界―海と列島文化2」、一九九一年、小学館、二九四ページ)したがって先にのべた金の淮水までの進出は、日本にとって脅威であったといっても必ずしも根拠のない事ではない。

ところで一二二一年の承久の乱の結果、後鳥羽上皇を隠岐に、順徳上皇を佐渡に流したが、これは一面において重要な人物を国防上重要な地点に流して、その方面の警備を厳にしたとはいえないであろうか。一二三四年金は元により滅亡したが、一二七一年の日蓮の佐渡配流も元を意識しての処置であったといえないであろうか。ただし、これらのことを実証する史料はない。

B 近世

(1) 金遣いと銀遣い

江戸時代の幕藩体制下では、東日本では金本位の経済、西日本では銀本位の経済であったと説かれてきた。本稿はその見方の当否を検討することを目的とする。

(イ)越中砺波郡江田村の百姓次郎兵衛は、承応三年(一六五四)の耕作に必要な食糧その他の費用を藩より借用した。入用銀は一一五匁で、下人一人の給銀四〇匁と習年の肥料代二〇匁が含まれている。(坂井誠一『富山県の歴史』、一九八〇年、山川出版社、一一三ページ)

(ロ)飛騨高山は金森氏が城主の時代(元禄五年―一六九二)には、諸商人から銀一〇―一五匁の運上を出させて、商売を免許する鑑札を与えていた。(中野効四郎『岐阜県の歴史』、一九九一年、山川出版社、一五五ページ)

(ハ)備前児島郡山田村では、嘉永二年(一八四九)一二月に「当秋違作

に付、小前の者共御年貢上納方差支難渋仕候に付、拝借奉願上候」とあつて、銀壹貫七百五拾壹匁九厘の借用証書があつた。(三宅家文書―『玉野市史料編』、玉野市文化財保護委員会、一九七九年―四〇七ページ)しかし一方では「問屋口銭定」(年月日不祥)では「米二百文、地藍玉金目に三步(分)五朱、干瓢同四歩五朱、鶏卵六歩」とあり、(同上書、四八〇ページ)必ずしも銀貨だけで生活しているわけではない。

(二)紀伊尾鷲の浦々においては、肝煎の給料が次のように定められていた。寛政五年(一七九三) 向井村銀八〇匁、矢浜村二五〇匁、中井浦三六〇匁などとみえる。(『尾鷲市史上巻』、尾鷲市役所、一九六九、一四三ページ)

(ホ)明治二年(一八六九) 一〇月三河国西尾藩では、一年間の雑税として米のほかに金一〇五匁、銀七七二匁四分一厘一毛永二四七貫二八一匁九分二厘四毛その他となっている。(『西尾市史近代』、西尾市史編纂委員会、一九七八、六ページ)

(ハ)嘉永年間土佐の宿毛村の職人の賃銀をみると次のようになっていく。(河北文書)「瓦葺五分取、左官一匁三分から六分、大工五分一匁三分、鍛冶六三匁―九〇匁であつた。(『宿毛市史』、宿毛市史編纂委員会、一九七七年、七三―七四ページ)

(ト)佐渡では元禄二年(一六八九) 赤泊村新兵衛が田畑屋敷を質入れしたときの記載様式では「一、家一軒 此御地子二匁三分、御帳面定納也代金拾五両は但佐渡小判也」と記されている。(『石塚家文書』、田中圭二

『帳箱の中の江戸時代史』上、一九九一年、刀水書房、一五二ページ) 佐渡は直轄領であり、関西方面、奥羽方面との交易もある特殊な経済地域であるからほかの地域と同列には論じられないが、金・銀両貨併用地域ということができよう。近江守山では「刀は二両位、宇治茶半斤三匁

二分五リン」と文化元年伴信友の「大坂・京・奈良紀行」に記す。(平井良朋解説、『ビブリア』九三号、平成元年一〇月、天理図書館、一三八―一三九ページ)

(チ)江戸時代、町民に銀貨を使わせようという目的で鑄造された明和五匁銀はあまり流通しなかった。続いてつくられた南鐔二朱判・文政二朱判・天保一分銀・嘉永一朱銀も江戸の生活にとってはなじめないものであつた。一方京都では、金貨の流通が御触書によって命令されたが、これもひろく流通しないままに終った。西国では中世末期から銀貨の流通がはじまり、東国では永楽銭等銭の流通のみの地域であつた。

(リ)以上のわずかな例で察知できるように、西国では銀遣い、東国では金遣いであることはほぼ明らかであるが、ただしそのシステムは日常生活の面にのみいえることであり、佐渡の例のごとく、銀のほかに小判を用いるところもあつた。銀は秤量貨幣で取り扱いが不便であるという理由も考えられる。したがってその地域の社会経済上の地位によって①金を本位貨幣、銀を補助貨幣とし日常生活には銀を用いる、②銀貨のみを用いる、③金貨のみを用いる、④金・銀貨は縁がうすく、日常生活は錢でここと足りる、諸地域にわかれるというのが筆者の当面の考え方である。

それでは金遣い・銀遣い(ここでは日常生活の面での相違という意味での)の境界はどこであるか。現在までのところあまり明確ではないが、岐阜・愛知県を結ぶ線あたりにあるかと思われる。司馬遼太郎氏によれば、中山道の柏原宿と今須宿とのあいだに寝物語の里(長久寺、児玉幸多解説『文政年間国郡全図』、一九七六年、近藤出版社、七八ページの「近江国」絵図中に「子モノカタリ」とみえる。)があり、『近江国輿地志略』によると江戸がわの二五軒が銀をつかい、美濃がわの五軒が金をつかい、小さい溝をさかいに近江弁と美濃弁とにわかれているという。(『街道を

ゆく・24・近江・奈良散歩』、一九九一年、朝日文庫、二二ページ)

(2) 江戸時代の諸相

(イ) 社会政策

播磨出石藩では、双子・三つ子・一〇歳までの児童に対して福祉手当を支給していた。また老人年金として、百四歳の老女に対して一人扶持(一日米五合)を与えていた。(『出石藩御用部屋日記』、文化一二年—明治五年、出石町史編纂室所蔵による。)三つ子に対しては、文政八年(一八二五)生まれてから十歳まで毎年米七俵を支給するという手厚い保護が加えられていた。(『読売新聞』、一九八二・七・九の記事による。)

(ロ) 庶民の苗字

高野山高室院には「高室院月牌帳」(天文五年・一五三六)が所蔵されていて、庶民の国・郡・村名・苗字が列举されている。(『寒川町史』)これによると江戸時代に庶民は苗字をもっていたことはほぼたしかで、一六世紀以前にさかのぼることも考えられる。

(圭室文雄「庶民は苗字をいつから名乗ったか」、『有隣』第一〇三号、一九九三・二・一〇)

(ハ) 著作権

天保一年八月廿二日付須原屋伊八(書物屋)から宇田川榕庵あて証文によると、板木の一部を書店が扱うという形式の著作権が認められていた。これを留板とよんでいる。(赤木昭夫『蘭学の時代』中公新書、一一九ページ)

(ニ) 賃金労働の発生

佐渡金山の大山帥味方但馬から前借金を受けとって働くことを契約した金掘り大工新五郎の史料が田中圭一『帳箱の中の江戸時代史・上』、刀水書房、一九九一年の三九四ページにのせられている。著者はこの契約

を短期間の雇用契約とし、身売りは従来考えられてきた人身売買的なものとは異なり、むしろ近代的な賃労働者の発生と考えていることは、まことに卓見といわねばならない。著者は多方面にわたり、江戸時代の見直しをしているが、示唆に富む見解が多く、例えば代官の発する掟と農民との関係なども従来考えもつかなかった見方を提示している。

(ホ) イギリス船の接近

天保二年(一八三一)二月一日、北海道厚岸近くのウラヤコタン(浜中町)の沖合に異国船が投錨した。そして小船に分乗した乗組員は海岸に接近し、発砲した。和人とアイヌ人が捕われ、民家はすべて焼き打ちにあった。翌日アイヌが一通の書状を持ち帰り、江戸のエンペラー(将軍のあやまり)に渡すようにいわれたという。この書状は現存しないが、レディーロウエナ号の船長ラッセルの日記中にてその写しが残されている。(遠藤雅子『幻の石碑—鎖国の日豪関係』、一九九三年、サイマル出版会、三一—三三ページ)「閣下はおそらくまだその事実をご存知ないかもしれませんが、アジタナ村の交戦から判断しますと、貴国側の戦術はかなり稚拙だと言わざるを得ません。イギリスは一二万の兵士の派兵が可能であり、彼らの鍛錬度はアジタナ村で戦ったわれわれの倍以上の実力を有しています。」とのべたあとで、次の様に主張する。「イギリス人は、自国の法にもとづき、他国においてその国の法律に従い、正義と平等が存在する限り法には従うべきと考えています。ですから日本の法律や宗教が侵される恐れなどまったくありません。われわれはかつて貴国で殺されたポルトガルやスペインの僧侶のように、無知な人間でもありません。現在のわれわれは文明化された時代に生きているのです。」と。ここに主張するような行動を、イギリスは世界中で示したであろうか。対日関係では、オランダの日本貿易独占を破ろうとするイギリスの行動

が暴力的であったことは、一八〇八年のフエートン号事件や一八一三年のラッフルズの長崎乗取り計画をみても明らかである。アジアにおける諸国の文明度はまったく眼中になかったに違いない。

(ハ)局外中立

戊辰戦争のさい、慶応四年一月二五日、英仏伊蘭普の六国は局外中立を宣言したが、これにより幕府は交戦団体となった。しかし一方新政府もまだ同様のあつかいであった。明治元年四月二日イギリス公使パークスはさいしょに信任状を天皇に提出し、二年二月二八日に六国は中立宣言を解除したので、明治政府は日本国の正式な政府と認められた。一方直轄領である佐渡では、慶応四年の段階で幕府と官軍に対して中立を決めており、五月二九日長州の軍艦の石炭を小木港にあずかり、七月には幕艦に対して兵糧の提供をしている。これが佐渡のばあいの中立のあり方であった。(田中圭一『帳箱の中の江戸時代史』下、一九九三年、刀水書房、四七四ページ)

(ト)東韃紀行

間宮林蔵が文化五年(一八〇八)に樺太を探検した時の記録「東韃紀行」(三巻)については、写本が国立国会図書館をはじめとして二〇種をこえるものが今日遺されており、刊本としては昭和十三年の北斗叢書一がある。(『補訂版国書総目録』第六巻、一九九〇年、岩波書店、三ページ)

さらに和歌山大学の江戸末期写本のほか、茨城歴史館・宣長記念館の写本が追加されている(『古典籍総合目録』第2巻、一九九〇年、岩波書店、一七五ページ)

これらより古く『国史文献解説』、一九五九年、朝倉書店には、「これはシーボルトによりヨーロッパに紹介され、間宮海峡の名を学界に公認

させる契機となった。昭和一七年(一九四二)の満鉄弘報課編『東韃紀行』に収められている。」と紹介している。

ところがこのたび筆者が神田の古書店でみつけ、東京工芸大学の所蔵となった一本は、上述の文献のいずれにも見当たらないものである。巻頭の「翻刻例言」によれば、①高橋景保の自筆と思われる「辛未中夏景保記」として黒竜江のことに関する記載がある。(同書六五―六八ページのらん外) 辛未は文化八年(一八一―)に当り、この書の原本はそこ成り立たと推定される。②付録として七ページにわたる満州文があり、訳(景保か)も付せられている。③図が豊富に載せられていて、本文だけでなく一〇ページの「飯屋」からはじまって六三ページの「サンタンコエ地図」まで一〇ページをこえている。

なお、大谷恒彦訳の『東韃紀行』、一九八一年、教育社は、国立公文書館内閣文庫所蔵の間宮林蔵献上本『東韃地方紀行』によっている。

C 近代

(1)「蛍の光」と領土

明治一四年一月の『小学唱歌集』では「蛍」という題であった。「別れの曲」としてひろく歌われた。最近ではスコットランドの民謡ではなくて賛美歌の替歌であるという説もあるが、(安田憲『咽歌と十字架』、一九九三年、音楽光友社、一八四―一八六ページ) ここで問題とするのは歌詞のうつり変わりである。四番は「千島のおくも沖繩も、八洲のうちの守りなり、いたらんくにいさおしく、つとめよわがせ、つつがなく」となっているが、千島に関しては明治八年(一八七五)の日本・ロシア間に結ばれた千島樺太交換条約により、千島列島全部が日本領となったことが思い出される。沖縄については、明治一二年アrikaのグラ

ント將軍が調停をしようとした琉球処分が問題となり、明治一三年清国との交渉は物別れとなった。日本政府は強引に一二年琉球藩を廃して沖縄県をおいた。この二つの事件をふまえて歌詞は作られたと考えられる。その後「螢の光」はさらに四番の歌詞が改められた。すなわち昭和一〇年（一九三五）に小学校に入った我々の世代は「台湾のはても樺太も八洲のうちの守りなり」と歌わされたのである。台湾は明治二八年下関条約の結果日本領となり、樺太は明治三八年のポーツマス条約により北緯五〇度以南がロシアから日本に割譲された。これらの事実が歌詞に反映しているのである。

今日では、二番の「筑紫のきわみ、みちのおく……」は航空機・新幹線の時代にふさわしくなく、また歌詞全体もむずかしいため、一番のみがくりかえし歌われることになった。（歌詞については、金田一春彦・安西愛子編『日本の唱歌』上、一九七七年、講談社、三六ページによった。）

(2) 法律と帝国議会・国会

(イ)大日本帝国憲法は明治三二年（一八八九）二月一日に発布されたが、「議會開会ノ時ヲ以テ此ノ憲法ヲシテ有効ナラシムルノ期トスヘシ」と規定されたことにより、明治三三年一月二九日施行された。この年は神武天皇紀元二五五〇年に当るということも多少関係があると思われる。ところで第一回帝国議会が開かれる以前にどんな法律がすでに存在していて、憲法施行後も有効とされたかというのが本稿の課題である。日本国憲法についても同様の考察をする。

明治一八年一二月二二日内閣制度がつくられ、太政官制は廃止され、立法府の憲法に先立って行政府が発足した。（明治憲法の条文中に「内閣」の文字が一字もないことはすでに指摘されている。）二〇年三月二三日所得税法が公布され、同年七月一日施行された。以下時代順に法令名を列

挙する。

二一・四・二五 市制。町村制

〃・四・三〇 枢密院官制

二二・二・一一 衆議院議員選挙法・貴族院令、衆議院と貴族院が対等である点は世界の憲法史上でもめずらしいことである。

二二・二・一一 会計法

〃・三・九 参謀本部条例

〃・三・一四 国税徴収法

〃五・一〇 会計検査院法

〃・二・二九 内閣官制（勅令）、各省大臣の帷幄上奏権が規定された。一九年二月二六日の「公文式」が勅令第一号であった。

二三・二・一〇日 裁判所構成法

〃四・二一 民事訴訟法 現行法の基本はこの時につくられた。

〃・五・一七 府県制・郡制、府県制は二一年二月四日の香川県設置により完成した。

〃・七・二五 集会及政社法

〃・九・八 税関法

〃・一〇・七 刑事訴訟法、同年一月一日施行、小学校令（勅令）

〃・一〇・三〇 教育に関する勅語

教育に関する法令はほとんどすべて勅令により定められた。次にそれを列挙するが、この伝統は現代にもひきつがれ、文部省令とか次官通達などの形で行政権によって教育行政が行なわれている。

明治五・八・三 学制（省令）

八・八・一八 学齢を満三歳から四歳に改める（布達）

九・一一・一四 東京女子師範学校内に幼稚園を開設（布達）

一二・九・二九 教育令（太政官布告）

一九・三・二 帝国大学令（勅令）

〃・四・一〇 師範学校・小学校・中学校令（勅令）

二〇・五・二一 学位令（勅令）

二九・三・三一 台湾統督府直轄諸学校官制（勅令）

三二・二・七 尋常中学校を中学校と改称、修業年限を5年とする（勅令）

令）

三二・八・三 私立学校令（勅令）

四〇・三・二 小学校令、修業年限を六年とする（勅令）

以上にあげたわずかな例によっても、内閣、裁判所、地方自治、教育、税法等主要なものは帝国議会発足以前にできあがっていることがわかるのである。

(ロ)日本国憲法は、昭和二年一月三日公布され、二年五月三日に施行されたが、施行以前に帝国議会で議決され、枢密院の諮詢を経た法律のおもなものを次にあげる。

昭和二〇・一二・二二 労働組合法

二一・九・二七 労働関係調整法

〃・一一・六 当用漢字表（一八五字）、現代かなづかい

二二・一・一六 皇室典範・内閣法・皇室経済法

〃・三・三一 財政法・教育基本法・学校教育法

〃・四・七 労働基準法

〃・四・一四 独占禁止法

〃・四・一六 裁判所法

〃・四・一七 地方自治法

〃・四・三〇 国会法

〃・五・二 枢密院廃止（勅令）、外国人登録令公布・施行（勅令二〇七号—さいごの勅令）

そして第一特別国会は同年五月二〇日に召集された。なお民法は総則・物権・債権編はいわゆる明治民法（明治二九・四・二七）で、後半の親族・相続編は昭和二年二月二二日に改正された。商法の基本的な部分は、内地雑居実施の年である明治三二年三月九日公布である。刑法は不敬罪・姦通罪の廃止等一部改正された（二二・一〇・二六）が、基本的には明治四〇年の旧憲法時代の法律が今日生きている。現在ほとんど死語になったしかもむずかしい漢字を連ねた条文は、すみやかに改正されるべきである。

帝国議会の役割は、予算案の審議のみといってよいくらいであったが、「国憲の最高機関」であるはずの国会も、発足当初からかなり重要な多くの法律の制定とは無縁の存在であったということができる。

(3) 北方領土

(イ)ソビエトが日本を攻撃するという方針は、一九四三年一月のテヘラン会談でスターリンがルーズベルト・チャーチルに告げたというのが正式と考えられているが、それに先立つモスクワ外相会議で、アメリカのハル國務長官にむかってスターリンは、晩餐会のおり対日参戦の意向を伝えた（二〇月三〇日）ことが明らかとなっている。（ペレジコフ「私はスターリンの通訳だった!」、『諸君』、文藝春秋、一九八二年九月号）この情報を日本側は全然キャッチすることはできなかった。そして一九四六年の四月まで有効であった日ソ中立条約をたよりにして南進政策を決定し（一九四〇年七月二七日）、同年九月二三日北部仏印に進駐する。中立条約は周知のように一九四五年四月五日モロトフにより不延長を通告され、八月八日の対日宣戦布告となり、中立条約はふみにじられた。

ここで一般論として、(軍事) 同盟条約・不可侵条約・中立条約を並べてみるに、条約としての重さはこの順になることは当然であり、中立条約に反するような同盟条約が結ばれたばあい、中立条約は意義を失い破棄されると考えられる。第二次大戦のばあい、一九四〇年に日独伊三国同盟が締結され、かつソビエトとドイツは交戦中であるから、中立条約はその段階で実質を失っていると解釈すべきであった。太平洋戦争の開戦は、一方においてアメリカにヨーロッパ戦線への参加の口実となり、他方ソビエトに対日宣戦の決意をさせるきっかけを与えたのである。この点において、政府および軍部の予測はきわめて甘かったというべきであろう。

(ロ) 一九四五年二月一日のヤルタ会談で、「クリル諸島はソビエトにひきわたされる」という密約が成立した。ポーランド軍の将校イワノフ(ミハール・リビコフスキー)がストックホルムの日本大使館へ送ってきた情報は、ソビエトの対日参戦密約に関するものであった。「ソ連はドイツの降伏より三ヶ月を準備期間として対日参戦するという重大情報を、私は特に心して暗号に組んだことを覚えている。中央からそれについて別に何の返答もなかったが、私もどはそれは当然中央に届いているものと思ひ込んでいた。」(小野寺百合子『バルト海のほとりにて』、一九八五年、共同通信社、一四八ページ)

ヤルタ協定に関する情報は、日本の対ソ外交政策に何の変更も与えなかったことは明らかである。

(イ) 一九四五年七月一七日に開かれたポツダム会談にスターリンは参加したが、七月二六日の対日宣言には参加せず(米英中三国共同宣言)、八月八日に対日宣戦を布告してポツダム宣言に参加した。日本は八月一四日宣言受諾を決定して連合国に申し入れた。しかるにソビエトは八月一

八日から二〇に至る間占守島で日本軍と戦闘し、二三日に停戦協定が結ばれた。しかし三十一日にはウルップを、二九日から九月三日にかけて国後・択捉・歯舞・色丹を占領した。この行動はポツダム宣言に参加した以上、現実に日本の領土を占領することによって大戦後の世界において発言権を得るためのものであった。これに関連して、日露戦争の末期に当る一九〇五年七月七日日本軍は南カラフトに上陸し、七月二七日には北カラフトに上陸して三十一日に全島を占領した事実が想起される。これはロシアの領土を占領したという既成事実を作るための軍事行動であったと解される。

カイロ宣言(一九四三・一一・二七)には、「同盟国は、自国のために利得も求めず、また領土拡張の念も有しない。」とあり、ポツダム宣言はその趣旨をうけついでいるはずであるから、ソビエトの千島列島占領はあきらかにポツダム宣言違反行為である。さらに同宣言の第四項の「日本国軍隊は、完全に武装を解除せられたる後、各自の家庭に復帰し、平和的且生産的の生活を営むの機会を得しめらるべし。」にも違反して、多くの日本人をシベリアに連行して強制労働にかりたてた。最近の新聞報道によると、当時の関東軍司令官山田乙三は停戦交渉のさい、日本人を労働力として使うことを容認したというし、さらに大本営は満州にこの時期の真相が徐徐に明らかになってきたようである。九月三日までに行われたいわゆる北方四島(不正確な表現である。)の占領は、いかなる国際条約に照らしても不当であり、力による事実上の占領であることは明白な事実である。これらの事実を岩波書店の『近代史総合年表』(改訂版)をはじめ、高校の教科書、吉川弘文館の『日本史年表』などにまったく記載がないのは、ソビエトの行動に対する評価はともかくとして、

明白な事実の記載を欠いているという点は理解できないことである。

(二)ヤルタ協定では「クリル諸島はソビエト連邦にひきわたされる。」となっているが、ダレスの書いたサンフランシスコ平和条約の草案(一九五一・三・二三)では「日本はソビエトユニオンにクリル諸島をひきわたす。」(hand over)と書かれている。したがってヤルタ協定でのとりきめは、一九五一年三月の段階ではそのまま平和条約の草案に生かされている。しかるにアメリカの原案に対してソビエトが異議を唱え、会議には参加するが条約に調印はしないとの態度があきらかになるに従って、草案は書き改められた。そして最終的には日本は千島列島に対する「すべての権利、権原及び請求権 (all right, title and claim) を放棄する。」と定められた。全権吉田茂はこれに調印したからこの時点で日本は千島列島に対する何らの領土的主張もできなくなったのである。ヤルタ協定はソビエトの参戦を求めたアメリカの妥協的産物であり、ソビエトの条約不調印が明らかになった段階ですら千島列島の放棄を求めたのである。『日本外交主要文書・年表(1)一九四一—一九六〇』、鹿島平和研究所編、一九八三年、四二〇ページ) 故に北方領土問題は単に日本とロシアとの問題に止まらず、いやむしろアメリカ自身が当事国であると考ええる。さらにサンフランシスコ条約調印国のすべてが当事国であって、これらの国々の了解をとりつけた上で、ソビエトの事実的占拠の解除をロシアに求めるべきでなかろうか。そう考えてくると北方領土問題はまことに解決困難なことという実感が湧いてくるのである。

(補注)

一九八一年飛鳥寺の西方にある飛鳥水落遺跡で漏刻の遺跡が発見された。律令制下、計時・報時・陰陽・暦・天文を司る陰陽寮の初見は、天

武四年(七七五)正月一日の条である。水落遺跡の遺構は、陰陽寮に相当する建物が存在したことをうかがわせる。(本下正史『飛鳥・藤原の都を掘る』、一九九三年、吉川弘文館、四二ページ以下)

その後の調査では、地下水路の遺構も発見されて、七世紀斉明朝における一連の大土木工事の一つと考えられている。

以上